

# 日本・地域経営まちづくり塾 ニュースレター

平成25年6月19日

## 目次

- 1 はじめに
- 1 岡田先生あいさつ
- 2 事起こしの実践紹介
- 4 事起こしの戦略的実践支援技法
- 5 四面会議システムの演習
- 6 まとめ
- 6 特別寄稿 テキスト解題その1
- 7 塾頭のコラム

## はじめに

第1回日本・地域経営まちづくり塾が平成25年5月18日(土)に京都大学黄檗プラザにて開催されました。

午前は、塾頭の岡田先生より本塾開塾の趣旨および運営方針、到達目標についてお話を頂きました。その後、大澤様、眞継様、加藤様より事(こと)起こしの実践事例を紹介頂き、多々納先生より四面会議システムについて説明して頂きました。

午後は、「被災地との絆づくり」というテーマで四面会議システムの演習を行いました。

## スケジュール

10:00~10:30	第一年次を迎えて、地域経営まちづくり塾・ 事始め	塾頭 岡田憲夫先生
10:30~11:30	事起こしの実践紹介	大澤文子氏 眞継進吾氏 加藤 修氏御夫妻
11:30~12:30	事起こしの戦略的実践支援技法の学び	
13:30~16:30	四面会議システムの演習 ～被災地との絆づくりの方法～	
16:30~17:00	まとめ	

## 岡田先生あいさつ

今年が本塾の初年度である。自分の言葉で語る、自ら事起こしのできる人財を目指そう。そして、本塾が多彩な色をもつ「エリスグレ人」のネットワークづくりの場としよう。

昨年は塾の姿を模索する一年となった。生みのプロセスがゼロ年だとすると、今年がまさに1年(元年)である。昨年度と比べて何が目に見える形で違うのか?そこで目指した事起こしがどのように現実となったのか?本塾の主催者を代表してはっきりと言えることは二つある。一つは日本・地域経営実践士協会を現実に立ちあげ、この春に一般社団法人として正式に認可を受けたことである。もう一つは本塾の講義で用いる最初のテキストをまとめ上げ、本協会の最初の出版物として用意したことである。

さて我々がこのたび立ち上げた日本・地域経営実践士協会の精神・理念のもとに、開催される塾の受講者には今後順を追つて初級・中級・上級のコースを修了し、認定を受けてもらう。ただし、この塾には厳密には先生というものはいない。それでいてどうして教えられるのか?どうして認定ができるのか?実は認定をする者は「先達」として、認定をされる者の少し先を先導していくが、共に修行を続けて行くのである。

上級を修了した者も、それは一つの高みの入り口に立つ資格を持つことを意味するにすぎない。また、本塾が取り上げる地域経営まちづくりとは小さな事起こしの繰り返しであるが、それは峠越え、峠越え、また峠越えであることを覚えておいてほしい。

また、塾生には不器用なりにも自分の言葉で語ることを意識してほしい。言葉の「意味」ではなく「価値」に反応し、魅せる表現を操る者が人を起こし、事を起こすことができる。

本塾が、限られた数の一色のエリート(粒選りの人達)の集まりを目指すのではなく、多彩な色とサイズを持つ粒々の「エリスグレ人(選り優れ人)」のネットワークを紡いでいく場としたい。塾生の皆さんはずひこのようなネットワークづくりに加わって、共に磨き合う事づくりの人財となってほしい。

## 事起こしの実践紹介① 大澤文子氏の講演

事起こしをするにあたり「何かする事を決める」のではなく「何を今実行するか」が大切である。私は近年、意識的に事起こしを実践してきた。その事例をいくつか紹介する。

まず、まちづくりグループの立ち上げを行った。これは、塾生の古賀君から教えてもらった Facebook を活用し、意見を交わせる場を作り、参加者同士のやり取りを行った。また、グループで四面会議を行い、理想を実現するための現実的な手段を考えた。

このようなやりとりを通して、東日本大震災の被災者に対する事起こしを着想し、実践するに至った。それは絵はがきを自ら作製し、切手と一緒に被災者に送る活動である。当初は少人数で実施していたが、次第に賛同する仲間が増え今では 10 数人で収集活動を行っている。また、実際に被災地を見たことがなかったため、最近休日を利用して車で福島県のいわき市、福島第二原発付近を見学した。被災地を訪れると、まだ新しく見える家でも、その周りには雑草がぼうぼうと生え、音が全く無く、人がいるという印象がなかった。

他にも、口コミによる繋がりを活かして亀岡の町おこし人と意見交換をする、まちづくりに関するシンポジウムに参加するなど、小さなことでもとにかく実行してきた。どんなに小さな事起こしでも積み重ねることにより、次のステップにつながる。そして、それぞれが事を起こして、塾という港に集まりつながっていくことが大切である。



被災地の写真を示し「事起こし」について説明する大澤さん

## 事起こしの実践紹介② 真継進吾氏の講演

私がまちづくりに携わったきっかけは、民間会社で勤務していた頃に、先輩から青年会議所に誘われたことである。それ以降、会議所の活動として、亀岡に暮らす人々には自分達のまちに誇りを持ってほしいと思い、まちづくりとして歴史や風土等のまちに眠っている資源を知ってもらうための事業を行ってきた。例えば、蛍にスポットを当てた事業では多くの人に参加してもらい、蛍が暮らしやすい環境を考えることを通して、環境に興味を持つてもらうことができたと感じている。しかし、「まちづくり」というものは道路や建物をつくる行政側の人、また経済活動に携わる人や地域に暮らす人など立場によって意味が異なることを考える必要がある。まちづくりは継続して行われなければならず、そのための仕組みづくりは重要である。特にまちづくりを行う人材の確保・育成が問題となる。青年会議所では任期が定められており、私はこれからという時に辞めなければならなかつた。こういった中で自分の経験を人材の育成に活かすべく、先輩・後輩とのネットワークを保ちながら、若い世代が活動するまでのサポートを行っていきたいと考えている。

## 事起こしの実践紹介③ 加藤修氏御夫妻の講演

### 加藤氏(ご主人)

私たちの住む智頭町は、鳥取県の南東部に位置し、町の面積の約9割が森林に覆われ、残りの1割に町民が住んでいる。平成の大合併に加わらずに、現在も「智頭町」として存在している。智頭町といえば、「ゼロ分のイチ運動」が有名であるが、私たちの地区が入ったきっかけはまちづくりをするというものではなく、自分たちの村をいかに維持するかという思いであった。また、町の観光振興として始めた森林セラピーは全国で有数と言われているが、町には旅館らしいものは3軒ほどしかなかつたので、町に泊まってもらえるようにと民泊を始めた。今では、私は宿泊者と酒を飲みながら話を交わすことが楽しみとなっている。

### 加藤夫人

民泊の現状として、民泊協議会は3年目を迎える。民泊50軒開業を目指とした普及活動では、現時点での37軒開業にまで到達した。昨年は日本村落研究学会が智頭町で開催され、120~130人ほどが私たちの民泊に宿泊した。この時は、大人数に泊まってもらうため、地域ぐるみで準備をし、パーティーも開催した。今年は中学生に利用してもらおうと考えており、それをきっかけとして、民泊をする文化を広げていきたいと考えている。さらに、この取り組みは地域による教育活動の一環であるとも捉えられている。

民泊をする上で一番難しいことは、献立を考えることである。当初は講師を招いて料理教室を開こうかと考えたが、やはり一番大事なことは地域の、その家庭の味を知ってもらうことであると考え、地域で集まって自分たちで料理教室を行い、地域の料理の勉強をしながら、各々の家庭の献立を考えている。

## 事起こしの戦略的実践支援技法の学び 四面会議システム実施演習に向けての条件設定づくり 多々納裕一先生

地域の事起こしは一人ではできない。事起こしをするための仲間が必要である。仲間をつくるためには、まわりにいる人をその気にさせる必要がある。そもそも仲間と友達の違いを調べてみると、仲間とは「同じ目的のために協力する人」とあり、友達とは「一緒に何かして、親しく交わる人」である。従って、志を共有できる仲間を作るためには、信頼関係や何らかの合意形成が必要である。ここでは、合意形成を目指すリスクコミュニケーションのプロセスとして、信頼(C), 気づき(A), 理解(U), 合意形成(S), 実施(E)という、いわゆる CAUSE プロセスに従って進める考えを示す。そこで各段階におけるコミュニケーションのポイントと四面会議の役割について説明する。

まず、最初のステップとして「信頼 (Credibility)」の確立が挙げられる。地域の歴史や、問題点を整理して、「我々はあなたたちの問題を解決するお手伝いをするために来たのであり、何かを奪うために来たのではない」ということを伝えなければならぬ。この段階での目的はあくまで信頼関係の構築であるため、初めに世間話をするということでも構わない。要は地域の歴史や問題点の整理も本格的な話をする前段階での話のネタ作りという意味合いがある。

次に、「気づき (Awareness)」の形成がある。ここでは、専門家が地域の状況のリスクや対応策を説明するとともに、住民の憂いでいることを調べる「憂慮分析」が重要である。例えば、東日本大震災の被災地で行われている事例として、足湯ボランティアがある。これは、仮設住宅等を訪問し、住民の方にたらいに足をつけてもらって、手を握ってマッサージするボランティア活動である。ほんの 20 分程度だが、話を生み出すきっかけができる。自然と出てくる住民の方の思いを知ることができる。「今、話してくれ!」という形式のアンケートやインタビューと異なり、自然と溢れる言葉を汲み取る有効な手法である。

そして、「気づき」の形成の後には、「理解 (Understanding)」がある。問題の難しさ、いつ、どうやって問題を解決するかを参加者に理解してもらい、ようやく「合意形成 (Solution)」に至る。四面会議が「信頼」、「気づき」、「理解」、「合意形成」などのプロセスにあたるか考えると、「理解」の場であると思う。やりたいことを各々が出し合うが、全てができるわけではない。やりたいことを達成するために、それぞれができるを取り出し、決めていく。そして「実行(Execution)」となる。このような過程で、取り組もうとしている問題の複雑性が理解され、参加者全員で共有することができる。こうして合意形成に至ることは、本塾などでよく使う言葉で、「『成解』(なるかい, せいかい)をつくる」ということである。

この成解をつくるプロセス、四面会議の難しさは実際に経験しないと分からないので、午後から実際に四面会議を行ってみよう。

---

四面会議は課題に対する「理解」を深めるために用いられる。四面会議を通じて、取り組む問題の複雑性を理解したり、肝となるポイントを仲間で共有したりすることが重要である。

---



## 四面会議システムの演習 テーマ:被災地とのつながり、絆をつくる

『成解』をつくるプロセス、四面会議の難しさを体験するために、全体を2グループに分けて「被災地とのつながり、絆をつくる」をテーマに、四面会議を実施しました。そこで得られた各グループの結果を以下に示します。

### ●Aグループ

#### 「総合管理」

- ・1年目：被災地の調査と対象地域の選定 予算資金調達のためのファンド設立 スキルリストの作成
- ・2年目：組織の立ち上げ 集会場所の設置
- ・3年目：工場等で一緒にものづくりをする お祭り・伝統行事を一緒に行う  
一緒にモノ・コトづくりを通じて、絆をつくる

#### 「情報・広報」

- ・1年目：被災地の自慢（風景・文化等）を発信（写真展・インターネット・TV等）
- ・2年目：コミュニティ紙の発行 文通等の実施
- ・3年目：双方向のある広報情報紙の作成  
被災地へ行く・被災地の方が他地域へ行く等の双方向の交流を目指す

#### 「人」

- ・1年目：足湯・アロマ等により被災地の方の健康をサポート
- ・2年目：文化交流を図る（郷土料理教室・キャンプ等）
- ・3年目：同窓会・同郷会の実施

#### 「モノ」

- ・1年目：備蓄食品等の放出・リサイクル品の発送
- ・2年目：日本各地で東北物産展の実施  
被災地商品ファンの獲得を目指す
- ・3年目：物流交流センター（アンテナショップ）の設立  
東北・被災地ブランドの確立を目指す



会議の様子（A グループ）

### ●Bグループ

#### 「総合管理」

- ・1年目：組織を設立し、イベント等の資金集めのためのバザーを企画  
被災地の住民の方々の情報収集
- ・2年目：イベントに必要な用具・備品等を手配
- ・3年目：スポーツ大会等簡単な行事から伝統的な祭りといった復活に時間の掛かるイベント等を興す  
住民同士の繋がりや交流の場での住民との会話から信頼関係の構築を目指す

#### 「情報・広報」

- ・1年目：市役所等の情報が有る所へ行き、情報を吸い上げる 情報集約の窓口を設置
- ・2年目：被災地でのコミュニティ形成にも着手し、その足掛かりとして談話スペースを設置
- ・3年目：集めた情報、取り組み等を外部へ発信

#### 「人」

- ・1年目：一人一人が出来る活動を中心に実施
- ・2年目：1年目に始まった活動から組織を形成  
被災者同士の思いを共有する場をつくり、体験者が助ける側になれるような人材育成を目指す
- ・3年目：被災地の方々が自立して活動出来るように、その組織から人材の育成を目指す

#### 「モノ」

- ・1年目：総合管理の流れと合わせて、物品の収集と資金集め
- ・2年目：情報部門の流れを見て、イベントコミュニティづくり
- ・3年目：ものの管理を継続的に行う仕組みづくり



会議の様子（B グループ）

## 四面会議を終えて ～まとめ～

岡田先生

皆さんは四面会議をやってみて、このようなやり方が本当にできるのか、得られた計画は実現できるのかと思うこともあるかもしれない。しかし、私は21世紀が参画社会になると考えていて、四面会議は、全員が参加する行動計画づくりを支援するための有力な方法になる。途中にディベートをはさみ、さらに逆の立場にたってもう一度ディベートをする。これにより欧米流の「win-lose の引き算のディベート」ではなく、「win-win のディベート」が成立する。つまり、欠点ばかり探し合うのではなく、「何でもっとこんなことも考えてくれないのか?」「どうして私たちを生かしてくれないのか」という思いを逆の立場でもディベートすることで考えることができ、さらに自分の考えた弱点もはっきりさせることができる。

寺谷さん

こういった取り組みを広げるときに、一緒のテーブルに着くことはなかなか受け入れてもらえることが難しい。多くの人は、こういったテーブルが既にあるところに参加することはできるが、もともと素地のないテーブルに着こうとすることは少ない。四面会議は全員参加、全員で共有することで、責任や覚悟も全員で持つことになる。このような取り組みを、人にすっと受け入れてもらえるにはどうしたらよいか?私はそのために「自分を作る」、「自分を鍛錬する」ことが大事であると思う。グループの中で、自分の姿があったり、消えたり、あるいはグループに色を付けたり、新たな色を加えたり。「四面会議に入る自分をどう作るか」ということを意識して、自分の鍛錬をしてほしい。

平塚さん

情報や人のつながりにおいて、インターネット等、仮想上でのやりとりが話題に上がっていることが多いと感じた。しかし、人ととの結びつきを考える上で、やはり「face to face」のやり取りが重要であることを再認識すべきである。

## 特別寄稿 テキスト解題 その1 ～本テキストの入り方～

塾頭 岡田憲夫

本テキストには以下の2通りの入り方がある。

- ① 第1章 発想転換の勧め (p7)から入る方法
- ② 第7章 本塾ゼロ年度の営みを改めて振り返って (p 65)から入る方法

皆さん、既に行政が行う「都市計画」や行政が主導するまちづくりの実務や理論を身につけているか、身につかつてあると考えている「自称・その道の専門家」であるときは、①のような入り方をすることをお勧めする。その場合、とっくりと図1-1の意味を理解していただきたい。本塾で学ぼうとする「地域経営まちづくり」のアプローチは、実はこの図において、「都市計画」と「地域経営まちづくり」はお互いに反対の極にあるとみなすことができる。その意味と理由については今後隨時説明していくことにしたい。

皆さん、もしこれまで「まちづくり」に縁遠い仕事にしか就いていなかったり、「普通の市民」で都市計画や行政が主導するまちづくりにも関係がないとしよう。その場合は、②のような入り方をするのが良いであろう。これはいわば本書のほぼ一番最後から読み始めることでもある。ただまったく「まちづくり」の中身やイメージについて白地である分、本塾が提唱する「地域経営まちづくり」の流儀をとりあえずそのまま簡単に受け入れることができるであろう。逆に「自称・その道の専門家」は、しばらくの間は得心がいかなかったり、どうしてこれが「まちづくり」と言えるのかといぶかしく思うかもしれない。

いざれにしても、まずは本塾が唱える「地域経営まちづくり」は、つまるところ皆さん一人ひとりが少しだけでも変わることでまちとの関わり方が変わり、その結果まちそのものが変わることである。そのためには、ささやかでも良いから小さな事起こしをすることから始めなければならない。その「まち」とは、皆さんのすぐ周りにある小さな生活環境(公共空間)のことと思えばよい。ご近所の公園、集合住宅の共同管理エリア、大学のキャンパス、使われなくなった小学校などである(テキスト p67)。

さあ、そのような小さな公共空間を探そう。そしてまず自身だけでも始められる小さな事起こしをすることでその実体験を各自が磨くことにしようではないか。

## 塾頭のコラム ~人と出会おう、書と出会おう~ No.1

### 【推薦図書 1】

#### 論力の時代-言葉の魅力の時代

宮原浩二郎 勁草書房 2005年

- 論力もまた人を人に従わせる「言葉の権力」である。その一人勝ちを防がなければならない。
- そのためには社会生活における「言葉の魅力」の比重を高め、言葉の意味よりも言葉の価値に反応する表現リテラシー(素手に身に着けた表現身体力)を高めることが大切。
- 言葉の権力を駆使する「インテリ」から距離をとり、言葉の総合力を身に着けた「知識人」のあり方を見直そう。
- 素手で考えよう。そして「感 反よう」。
- 「自分の言葉」で語ろう。



### 【推薦図書 2】

#### 絶望しそうになつたら道元を読め！

#### 『正法眼蔵』の「現成公案」だけを熟読する

山田史生 光文社新書 2012年

この本で説いている修行とその一里塚としての「証」は、「証」に至ってからが、さらなる修行が始まり、それを繰り返していくというふうに解釈することもできそうだ。この解釈に倣えば、本塾で、認証する(される)ということは、そこにいたる学びと、そこから始まるさらなる学びのプロセスを繰り返すことを前提に「認証」を一里塚として設定し、本塾はその学びの道場を提供しつづけることを意図している。そこに本塾の大きな意義があると考えても良いであろう。



## 編集後記

第一回目の塾では、塾の起り、事起こしの実践事例、四面会議等、非常に多くの事を学びました。数ある学びの中でも、事起こしの実践事例の紹介の際に加藤さんから頂いた『桜餅』が、私の記憶に強く残っています。余計な添加物等が入っていない自然な味が非常に心地良く、桜餅を通じて智頭町に対する興味が深まりました。併せて、五感で味わった経験は忘れ難いという事を再認識し、自ら体験して学ぶ、実践するという姿勢を大切にしていきたいと感じました。(谷本隆介)